

希望を耕す

# 若い世代の刺激

東京大学教授・建築学  
**松村秀一**  
Shuichi Matsumura

## マイルス・デイヴィス

日頃 iPod に数千曲ほど入れて持ち歩いている。大学院生時代にウォークマンが世に出て以来、音楽を聴かずに通動するのは難しくなってしまった。団塊の世代の方々から見れば、チャラチャラした若僧の習慣と映ったものだろう。そんな私ももう還暦である。

数千曲をシャッフルモードで再生しているのでも、十年以上忘れていたような曲にハッとさせられることもある。最近ではマイルス・デイヴィス（一九二六—一九九一）だ。一九七〇年のアルバム『ピッチェズ・ブリュー』冒頭の『アラオズ・ダンス』が唐突に再生された。ジャズファンではないが、マイルスは好きだし、このアルバムはいわゆる名盤だし、ロックで育った私には親しみやすい電子楽器系でもあったから若い頃はよく聴いた。

久々に聴いてみてその瑞々しい勢いに改めて心躍らされた。ジャズを全くご存じない方にはわかりにくくて申し訳ないが、後にいづれも大御所になる当時の若い世代のアーティストたち、ウェイン・ショーター、ジョー・ザビヌル、チック・コリア、ジャック・デイジョネット、ジョン・マクラフリンらが、緩い統制の下で才能

の火花を散らし、そこにマイルスが独特のフレーズで切り込み、全体を造形する。半世紀近く前の録音だが、カッコ良すぎる。

よく言われることだが、マイルスは若い才能を見出し、彼らと刺激し合いながらお互いを未知の領域へと導く、特別な存在だった。それは初期には、同年代のジョン・コルトレーンやビル・エヴァンス、ソニー・ロリンズ、キャノンボール・アダレイ、ウイントン・ケリーであり、『ピッチェズ・ブリュー』の前の時期には、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスであった。『ピッチェズ・ブリュー』以後には、キース・ジャレット、マーク・スミラー、アル・フォスターがマイルスのバンドから育っている。これらのメンバーがジャズ史に占める位置の大きさには改めて驚かされる。一体マイルスがいなかったら、ジャズはどうなっていたのだろうか。ジャズファンでなくてもその偉大さには恐れ入るしかない。

## HEAD研究会

マイルスと比べるのは誠におこがましいが、自分より若い世代とはこのような関係を結びたいものである。「先生なんか、毎日のように若い学生さんたちと接触しているのだから、色々と

刺激を受けるでしょう」などと言われるが、それがそうでもない。特に自分の研究室の出身者になると、専門分野が近すぎるせいか、こちらの感度が低いせいか、『ピッチェズ・ブリュー』のような瑞々しい仕事は一緒にできそうにもない。マイルスだって、育てながら刺激し合ったのは、自分と同じトランペット奏者ではない。ピアノ、サクソ、ギター、ベース、ドラム、パーカッション等別の楽器の奏者たちだ。そこがポイントなのだと思う。自分と異なる楽器をやっているから、安易にわかったような気になることなく、素直な気持ちで刺激し合えただろう。そう考えると、私のような仕事では同じ楽器の先輩や後輩と接していることが多すぎて、他の楽器の若手奏者と付き合う機会は限られている。建設業の皆さんも案外そうなのではないだろうか。だから、そういう機会は敢えて作らなければ、マイルスのようにいつも瑞々しく未知の領域を切り拓ける状態には近付けない。

そういう思いもあって、二〇〇八年に建築家の松永安光さん、山本想太郎さん、都市系シンクタンクの清水義次さん、実業家の長屋博さんたちと一緒に、HEAD (Home & Environ-

ment Advanced Design) 研究会という集まりを立ち上げた (<http://www.head-sos.jp>)。多様な活動領域の若い人たちが集まり、いわば様々な楽器の奏者が集まらないとできないようなことを次々に生み出していく、そんな場が理想だった。

これまでのところ、HEADはこの理想にとても近い場になっている。リノベーションまわりの人たちが例にとれば、三十代の不動産オーナーたちがいるし、四十代の不動産管理業もいるし、シェア・スペース運営、飲食、旅館といったコンテンツ系を業域に加えて起業する二十〜四十代の生きの良い建築系の人たちもいる。私にとっては、HEADがなければ出会っていない人たちが、その活動や発言は刺激に満ちている。

ある時、地方創生を再考するシンポジウムの提案があったので、「石破大臣(当時)を呼んだらどう？」と軽口を叩いたら、シンポジウム当日車座的な会場に本当に石破さんが来て「地方創生には皆さんのようなワカモノが必要なので」と、場を盛り上げておられた。若い世代、その実行力にも舌を巻かされる。



HEAD研究会から始まった北九州リノベーションスクール。2015年2月の8回目、小倉魚町銀天街での集合写真。左端白髪男が筆者。前列に、大先輩の清水義次さんの姿もあるが、今や日本のリノベーション業界を先導する大島芳彦さん、嶋田洋平さん、徳田光弘さん、青木純さん、吉里裕也さん、西村浩さん、明石卓己さん、宮崎晃吉さんたちの姿があって頼もしい。私よりずっと若い人たちだ。(写真提供：(株)北九州家守舎)